

探究学習の現場から

第9回 群馬県立伊勢崎清明高校

▶設立:1915年 ▶種別:全日制/普通科/共学 ▶生徒数:1学年約240人
 ▶2021年に校訓を基にグランドデザインを策定。「SEIMEI力~これからの社会をたくましく生きる力~を育む」掲げる
 ▶2021年度合格実績(現役のみ):国公立大は、群馬大、東京学芸大、群馬県立県民健康科学大、高崎経済大、群馬県立女子大に15人が合格。私立大は、青山学院大、法政大、日本大、共愛学園前橋国際大、桐生大、埼玉工業大、高崎健康福祉大、高崎商科大などに延べ164人が合格

伊勢崎清明高校の探究学習

(2022年入学者の例)

内容	1年次は地元企業での探究型インターンシップを経験。内容を発表するほか、キャッチコピーワークショップを受講。 2年次は各自が自由にテーマを設定し、仮説を立て、その仮説を検証。最終発表でプレゼンする。	
対象・期間・時数	・全ての生徒が1・2年次に履修 ・「総合的な探究の時間」(週1コマ)を活用	体制 ・ガイダンスセンター(教員8人)と各年次主任、探究系の教員が中心 ・地域と連携した教育活動をコーディネートするNPOが協力
テーマ例 (2021年度入学者)	コロナ拡大前後でライブの当選倍率はどう変わるのか/なぜ韓国コスメは人気なのか /女子サッカーに新しくきたWEリーグは盛り上がるのか/シャトレゼと不二家どっちが人気か	評価方法 ・中間発表、最終発表で生徒同士がコメントカードを使って相互評価するほか、NPOの探究アドバイザーから講評を受ける

プログラムの流れ

	1年次	2年次	3年次	
内容	「地域社会で働く大人にインタビュー」 「探究型インターンシップ体験」 ・アポイントを取って地域の社会人にインタビュー。インタビュー内容について壁新聞を作成 ・地元企業等で3日間のインターンシップを体験。その内容をポスターセッションでプレゼン ・キャッチコピーワークショップへの参加など	「探究インタビュー」 「興味・関心に基づく個人探究」 ・アポイントを取って地域の社会人にインタビュー。スライドにインタビュー内容をまとめる ・インタビューをふまえて、さらに自分が深めたいテーマを設定し、個人探究。仮説→検証を繰り返す。中間発表(ポスターセッション)を経て、最終発表につなげる ・3年次、進路が決まった生徒は、個人探究をさらに深める時間を設ける		

*取材を基に編集部で作成。



(写真上・左下)企業へのインターンシップの申し込みを電話で行う1年生。大人と電話で話すこと自体も社会体験の一つ。(右下)個人探究のテーマ決めを行う2年生の様子。PC画面上にキーワードを並べ、動かしながら、自分の興味・関心を探っていく。

20年周期で繰り返すのか?」をテーマにした探究活動を行いました。生徒は親や祖父母世代の大人にインタビューするほか、当時の新聞などから日本経済の状況や社会的事件からの影響についてま

大学への期待

生徒の疑問を受け付ける窓口の設置

地元の大学にインターンシップを受け入れてもらっているほか、キャッチコピー講座や教員ワークショップで高崎商科大学のサポートを受けています。今後は探究で生まれた生徒の疑問に、専門家が対応していただければいいです。こうした要望にワンストップ対応する窓口を設けることをぜひ検討してください。

今、変化の激しい社会の中で、柔軟な思考を持ってクリエイティブに物事を考えられる人が求められています。従来型の学校教育では対応できないと感じています。50年後の未来をつくる高校生を育てるために、どのような探究の授業が有効なのか?教員側も探究学習を探究していきます。

「知りたい」という原動力が 学びの動機を育む



ガイダンスセンター長

篠原 真美子

しのはらまみこ ●教員歴29年。群馬県立中之条高校(現吾妻中央高校)、勢多農林高校、吉井高校を経て2018年より現任教。2020年から総合探究を担当。担当教科は芸術科(書道)、国語科。

**社会を知り自分を知る
探究型インターンシップ**
 本校の探究学習の目的は、グランドデザインに掲げた「SEIMEI力」これからの社会をたくましく生きる力を育むことです。大正時代に創立した女子校を前身とする本校は、素直で控えめな生徒が多く見られます。こうした生徒に探究を通して予測が難しい社会の中でも自分の可能性を

見だし、力強く生き抜く力を身に付けてほしいという願いがあります。
 探究の授業は、生徒の希望進路実現をサポートする「ガイダンスセンター」が中心になって推進しています。現在、8人の教員がメンバーですが、実際の授業では他の教員も関わります。めざす方向を共有し、目線を合わせたうえで探究を進めるべきという考えの下、われわれ教員自身がワークショップで策定したグランドデザインを出発点に、授業内容を考えました。
 探究学習の最大の問題は「教員自身、探究学習の経験がない」ことです。そこで、県内で10代向けの教育支援をしているNPOに協力を仰ぎ、アドバイスを受けながら実施しています。
 本校の探究で特徴的なのは1年次2学期に3日間の探究型インターンシップを設けている点です。これは、2年次でのテーマ探究の前に、地元企業での体験を通じて社会を知っておくことが目的です。何をするかは生徒と企業が相談して決めます。仕事体験でも、社員へのインタビューでも、何でもよい。「その仕事が地域社会にどのような影響をもたらしているか」「自分が社会に出るころ、そ

の仕事はどうなりそうか」など、今、そして将来まで含めて、社会を支える仕事や人、会社の実態を知ることがきっかけに、進路を考えてもらいます。これは、学校内の授業ではできないことです。
 インターンシップ先の企業には生徒が自分たちでアポイントを取り、打ち合わせをします。そのため、社会人と話す予行練習として、夏休みに一度、企業人へのインタビューを経験させています。
 本年度のインターンシップ協力企業は84社。地元の製造業や病院、市役所、高齢者施設、農協、大学、保育園、Jリーグのザスパクサツ群馬まで、さまざまです。県の中小企業家同友会に協力を仰ぐほか、放課後にわれわれ教員が企業を訪問し、新規開拓に奔走しました。「社会と学校をつなぐ新しい教育のため、生徒に地域社会の現状を学ばせたい」という趣旨をきちんと説明した結果、多くの企業が協力してくださっています。
**心から「知りたい」が
探究心を芽生えさせる**
 2年次は一人ひとりがテーマを設定し、自分なりの仮説を立て、それを検証していく個人探究に入ります。何をテーマにするかも、